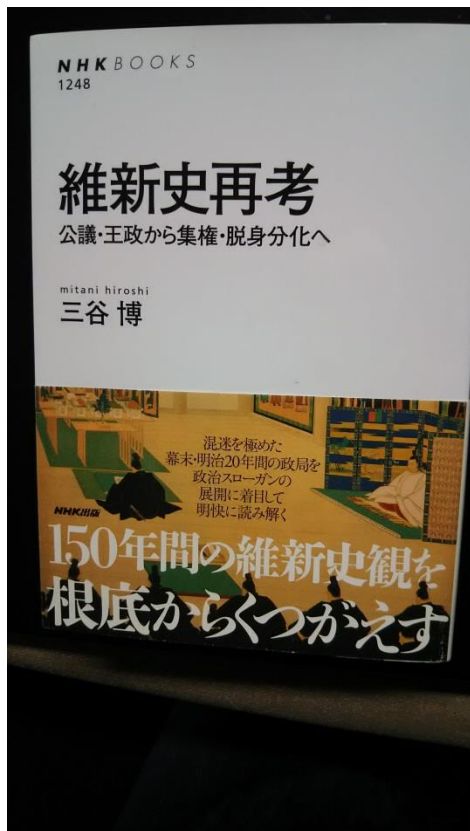


三谷 博著『維新史再考—公議・王政から集権・脱身分化へ』

NHK ブックス 1248・2017年12月刊・本体1700円＋税

「明治維新は自明の歴史ではない。また、日本人のためのみのものでもない。」
(6頁) これは本書まえがきの末尾で発せられた、著者の執筆宣言である。

幕末維新で何が変わったのだろうか？ わたしのようなシロウト読者の通念では、入口の道しるべには「尊王攘夷」とあり、出口には「専制開化」の道路標識が立っている。尊王の夢は「帝国憲法」で実現したのか？ 攘夷の志は「文明開化」で成就したのか？ そこにネジレ、あるいは断絶、あるいは落丁のようなものが感じられないだろうか？ そもそも最初の道標が間違っていたのだろうか？ ならばその過程で、いったい何が起こったのか？



本書によれば、維新革命が達成したのは、列強が主導するグローバル世界への参入と、政治体制の中央集権化と、身分制の解体(国民の創出)である。これらはいずれも客観的に検証可能な歴史事象であり、こうした大事業を最小限度の犠牲で成し遂げたところに明治維新のユニークさがあり、そのユニークな過程を客観的に説明し切ることこそ、本書の眼目であるとされる。

さらに、「維新というと、とかく活躍した特定の藩や個人、そして彼らの敵役(かたきやく)に注目しがちである」(4頁)ことを、著者はこれまでの維新史の通弊とする。

「二十世紀に書かれた維新史では、しばしば最も急進的な道を選んだ長州と尊攘運動が重視されたが、実のところ、安政五年政変の際、長州は政界に存在しなかった。…明治期を含めると約二十年に及んだ政治

変革の過程では、尊攘に限らず、多様な政治課題が登場し、それらを解決しようと様々な政治勢力が競争と提携を試みた。本書では、その全体を通観し、局面ごとに最も活躍した主体群に注目しつつ、それらが織りなした各時期の動きを丁寧に紹介してゆきたい。」(162頁)

こうして、禁裏、公儀、大名領国、家臣、陪臣、牢人といった政治アクター（主体）たちが、海防強兵、尊王攘夷、言路洞開、人材登用、公武合体、公議公論、王政復古、朝敵征伐といった、その都度その都度に優勢な“旗印”を掲げて主導権を競い合うその連鎖を、本書は論述していく。主導権獲得のための多数派形成活動のなかで、全面对峙が生む多大の犠牲は回避されたのである。

竹越与三郎は『新日本史』（明治 26 年）で革命を、過去に範を求める「復古的革命」、理想は未来にありとする「理想的革命」、「現在身に降り積もりたる痛苦に堪えずして」発する「乱世的の革命（アナルキカルレボリューション）」の三つに分類し、最後者の例に維新革命を当てた。本書は登場するアクターたちの思想や世界観に過剰な思い入れをすることなく、竹越の言う「アナルキカル」な成り行きが、政治過程として克明に記述される。その筆致は明快で、爽快で、時に痛快である。

しかし、個人に宿るものとしての思想や理念が等閑視されているわけでは、決してない。後に「政体」として実現する政治体制構想を持っていた橋本左内や、王政復古の可能性を予見していた岩倉具視が、その先見性を称賛される。

「明治維新」という歴史ヴィジョンがよりリアルなものになり、19 世紀後半の東アジアの一隅で起こったこととして近代世界史のなかにきっちり定位される、という読後感をわたしは味わった。

グローバル・スタンダード（世界標準）で語られる維新史とは、こういうものなのかもしれない。
(森本政彦記・2018/6/20)